

頼山陽と一ツ戸の宿

溝 淵 芳 正

本誌一〇五号で「江戸時代の宿場一ツ戸」について報告したが、今回は一ツ戸の宿に宿泊した頼山陽に関するエピソードを中心に、宿場一ツ戸について紹介してみたい。

文政元年（一八一八）十二月五日に頼山陽は日田から山国谷を訪れ、一ツ戸の宿場に宿泊した。

当時の山津屋は財政的に恵まれ、宿屋としても一ツ戸ではいちばん良く、客筋もよかったと言われているので山陽の宿泊はおそらく山津屋であつたらうと考えられる。

山陽は『耶馬溪図巻記』に次のように記している。

（前略）臘月五日豊前に入る。杜実村もりざねに至り、一水の北より来るに遇う、蓋し源を彦山に発する者なり。沿うて東すること数十里（この一里は六丁）、昏黒なれど左右の峰巒皆凡に非ざるを覚ゆ。山、溪、相、迫、る、処、山、腹、を、鑿、ち、て、道、と、な、し、又、牖、（窓）を、穿、ち、て、明、を、取、れ、り、余、炬、（たいまつ）を、買、い、て、入、る。牖、に、遇、う、て、窺、え、ば、月、の、溪、水、に、在、り、て、朗、然、た、る、を、見、る。宮園村に至つて宿す。翌日大霧、余好山を失わんことを恐れ、霧の霽はるるを待つて乃ち発す。（原漢文、傍点は筆者）

右の文中に、「山腹を鑿ちて道となし、又牖を穿ちて明を取れり」とあるのは一ツ戸隊道のことである。

この隧道は文化二年（一八〇五）に完成している。山陽の訪れる十三年前である。それ以前は日田から来るのには庄屋村か

ら川沿いに妙ヶ野へ出て川を渡っていた。今の江洲井堰（当時の江洲井堰はまだ川下にあった）の上手に橋があった。もっとも、橋とはいっても名ばかりで、蛇籠じょうろうという直径一メートル余の竹で編んだ円筒形のを、二個づつ並べて、四メートルおきぐらいに据え、その中に大きな石を詰め込んで固定し、これを橋脚にし、その上に丸木を組んで渡し往来するのである。

享和二年（一八〇二）に、尾張の商人菱屋平七が耶馬溪を訪れたときの旅日記『筑紫紀行』の四月二十四日のくだりに次の記述がある。

村（宮園村）を過ぐれば川あり。十町ばかり行けば又川あり。二つとも石を積み上げて柱として、上に丸木をならべてその上に石土を敷きて橋とせり。是を過ぐれば一ツ戸村に至る。人家二十軒ばかりあれど茶屋はなし。又川を二つ渡りて中摩村に至る。

菱屋平七は遂道の完成する三年前に訪れているから旧代官道を通っている。当時、宮園村から中摩村の間は川を渡らずに済むように新しい道の附替工事が行なわれていた筈だが、菱屋平七はそのことにはなにも触れていない。

記録によれば、一ツ戸の遂道は長さが四十三間（約七十八メートル）、高さは平均七尺九寸七分余（約二、四メートル）、敷は七尺四寸余（約二、二メートル）で、明り窓が七ヶ所あった、とある。

山陽は、もう日暮れていたもので、松明を買って求めて遂道の中に入り、眼下に流れる山国川の瀬音を聞きながら、明り窓からしばし月影を眺めて、旅情をなぐさめたようである。

村人はこの隧道のことを「岩穴いわな」と呼んでいた。しかし当時の岩穴は再三の改修工事によって、今は僅かに一部を残すだけである。この残された岩穴には洩に臨んで明り窓がある。山陽がのぞきたい「牖」は、或はこれかも知れない。

山陽がこの日、広瀬淡窓とその門人たちに豆田の川原町まで見送られ、山国谷へと入ったことについて、面白い話が広瀬恒太氏著『日田御役所から日田縣へ』の中に記されている。ついでに紹介しておこう。

山陽が広瀬淡窓のもとを辞してからしばらく経ったある日、淡窓の家の雪隠の汲取りをしていたところ、糞尿とともに一冊の本を汲み上げた。よく水で洗って見ると、「詩韻含英」という本で、それには頼久太郎と墨黒々く書かれていた。山陽が落した本だったのである。

そのいきさつはこうである。

山陽と淡窓が詩の競作をしていたところ、山陽は決められた時間内に平仄ひようそくがどうしても合わず、困った山陽は、ひそかに用便にこと寄せて雪隠に行き、「詩韻含英」を取り出して同韻の文字をさがしていた。ところがどうしたはずみか、過ってその本を便所の中へ取り落してしまった。山陽は拾うにも拾えず、と言って、このことを打ち明けるわけにもいかず、さすればこれ以上永居をして、詩の競作をしたくないというので、それまでは、

酒良し、客良し、景色よし、

三つ良ければ、此の年は……

と詩作していたのが急の出発となったものである。

こののち山陽は再び耶馬溪を探賞し、このとき樋山路の浄真寺に善慶上人を訪ねて一泊している。

因みに、山陽がこのときの旅で詠じた「耶馬溪山天下無」の一句は、「耶馬溪函巻記」とともに、奇勝耶馬溪を天下に紹介するきっかけとなったのである。「耶馬溪」という名称も、山陽がこのとき始めて用いたのであった。

さてまた、『日田永山布政史料』に、「文化元甲子三月、奉幣使御用四日市日記」というのがある。宇佐神宮奉幣使参向の御用奉仕に当たったときの日記である。日田代官所支配の天領からは庄屋らが残らず御用を御せつかつていく。

この日記を見ると、文化元年（一八〇四）四月九日、御用を終えた日田の一行が四日市からの帰途、一ツ戸に一泊したこと

を記している。行きがけは口ノ林（耶馬溪町）の山口屋に一泊している。口ノ林もまた宿場だったのである。

今もそうであるが、江戸時代の一ツ戸は、屋並が道の両側に軒に列ねており、道幅も当時としては他より一段と広く、宿場としてのたたずまいをなしていた。「筑紫紀行」には「茶屋はなし」とあるが、江戸期を通じて酒屋はあった。宿場故の需要があったからであろう。

（下毛郡耶馬溪町文化財調査委員・耶馬溪町宮園）

大分県地方史料叢書(三)

豊前国村明細帳(一)

豊前国六六ヶ村の村名、村高、領主名を記した豊前国高帳の他、宇佐郡下麻生村、宇佐村、元重組、田口組、下毛郡今津組、宮園村、中摩村の村明細帳など八編を収録。近世史研究必備の書。

（会員一八〇〇円、会員外二五〇〇円送料共）

発行所 大分県地方史研究会

大分県地方史料叢書(一)

豊後国村明細帳(九)

肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録。近世史研究必備の書。

（会員二五〇〇円、会員外三〇〇〇円送料共）

発行所 大分県地方史研究会